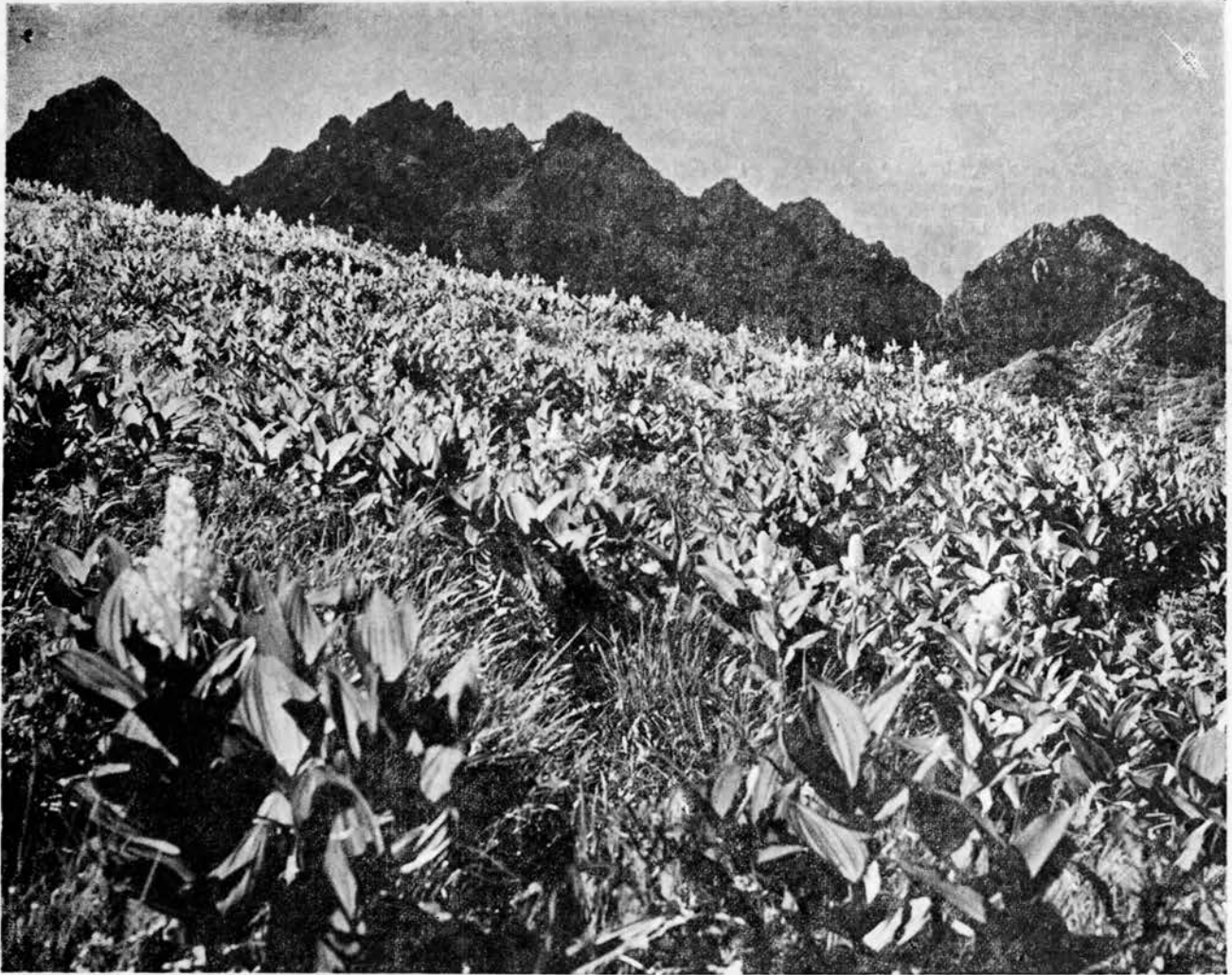


山と博物館

第14巻 第7号

1969年7月25日

大町山岳博物館



奥又白初夏(又白池附近にて)

撮影 堀 勝 彦

くず持ち帰り運動

つゆ空のもとで美しく咲き乱れていた高山植物は、つゆあけと共にわっとばかりに押し寄せる人の波に踏みにじられ、あたりかまわず投げ捨てられた空罐や紙くずの陰にあわれをとどめた姿となって短かい夏が過ぎ終る。

こんな状態の繰り返し返しが自然景勝地といわれる山岳地域の夏 風物誌でもある。

包装材料として紙製品が多く、人影がまばらでゴミの量が少なかった一頃は、これらのくずは雪の下になに風雨にさらされ自然に土と化した。しかし、近年のようにビニールやポリ袋、空罐など腐りにくい各種の材料が豊富にまわり、それを捨てる人の数も加速度的に多くなるにつれて、くずのない景勝地を探すのに苦勞することになる。

昭和三年厚生省の主唱する「自然に親しむ運動」の一つの行事として、公園道德の普及及び事故防止の項で「くず持ち帰り運動」がとり上げられた。

急激に増加する公園利用者が、国有鉄道などで慣らされた足下にゴミを投げ捨てる習慣のまま登山路沿いをよこして行くとしたならば、それを片付ける者が利用者の一人一人に専属について歩かねばならないことになる。

その後「くず持ち帰り運動」はしばらく慣例行事として続けられたが、どうしたことか昭和四〇年頃になるとこの具体的で愛きょうさえあった言葉は実施要綱から消え、公徳心の普及高揚など抽象的な用語に置きかえられてしまった。

ともあれ、国立公園は我々国民一人一人の所有物である。企業家だけのものではなければお役人だけのものでもない。そして、その大多数は自分で汚した場所はきたないと感じなくとも、他人が汚した所では不快に感ずる人々である。

お互いに「くず持ち帰り運動」の真意を再考してみたいものである。

(山猿)

山の遭難をなくそう

——夏山の最盛期を迎えて——

水 田 広

二人の女性の教訓

女性二人が一〇日も山の中をさまよい歩き無事に助けられた北アルプスの遭難事故はつい先年の夏山のことでした。

ことしもまた夏山の最盛期を迎えました。

登山者のメッカとして親しまれている長野県の山や高原には、老若男女を問わず全国から多数の登山者やハイカーが訪れることとされています。夏山は、比較的天候などの気象条件が安定しているほか、交通の便もよく山小屋も開設するなど登山の条件がよいため、小学生から高齢者にいたるまでそれぞれ体力や経験に応じて登山のだいご味を味わうことができます。しかし、あの人が発ったからとか、友達が発るからとかいった安易な考え方で登山をすると大変なことになります。最近では別荘へ遊びにきたがちょうど天気がよくあったので登山をしたとか、観光地めぐりの旅行の一行程として登山を行なうといった思いっきの登山をする者、またはツーリスト的な登山者(?)が急激に増加しています。特に昨年の夏山開幕とともに北ア西穂高岳に発生した大陂府の女性二人の遭難事故については、人間の生命の尊さを教えた貴重な教訓であるとともに、山の厳しさを知らないこの種の登山者の増加を裏付けた事件として記憶に新しいところでもあります。

長野県内の遭難事故

山の遭難事故が、社会的な問題として大きくとりあげられるようになったのは昭和三四、五年からですが、県警察が遭難統計をはじめた昭和二十九年以来昨年までの過去一五年間に長野県内の山岳に発生した遭難事故は、一

、二二三件に達し、死者は六九五五人、負傷者は七九五人、病気等で無事に救助された者三十一人で遭難者は合計一、八二一人を数えています。これは警察に届出のあった事故ですがこのほか、負傷しても自力で救助し届出のない遭難事故もあるので、統計にあらわれない潜在的な遭難事故を加えたとかなり増加するものと思います。また、ここ数年來、県内の山岳遭難事故は年間一〇〇件を越している状況であって、全国の総発生件数のおよそ二五パーセントを占めています。ちなみに、剣岳、立山連峰を有する富山県の昨年の遭難事故は三七件で、全国比では七・八パーセントまた谷川岳を有する群馬県は三六件で七・四パーセントとなっており、いずれも本県の三分の一の発生件数であって、県内全域が著名な山岳地帯である本県の特長がよくあらわれており、こんなところにも遭難対策の難かしさがあるかと思えます。

ところで、この一、二二三件の山岳遭難事故を、春山(四、五、六月)、夏山(七、八月)、表現が適当かどうか疑問ですが秋山(九、一〇、十一月)、冬山(十二月、一、二、三月)のシーズン別に分けてみると、夏山の遭難が圧倒的に多く四五・八パーセントを占めており、ついで冬山、春山、秋山の順となつていきます。さらにこの夏山遭難事故(五六二件)の発生状況を山岳別にみると、北アルプスが四四九件で全体のおよそ八〇パーセントを占めている状況であります。このことは登山者にもいえることであって、特に夏山においては、登山条件がよいので一度は有名な北アルプスに登ってみたい、三、〇〇〇メー

トルの稜線を踏んでみたい、といった素朴な願いが北アルプスに登山者を集中せしめているゆえんのものであり、加えて最近では、レジャーとして海水浴や旅行を選ぶことと同様に余暇利用の場として登山を考へ、いわゆる観光的登山者が、北アルプスを選び登山しているという事実も見のがすことのできない大きな要因となつているといえます。

さて、遭難者の住所地をみるとわかるように、登山者は北は北海道から南は九州まで全国から集まってきました。昨年長野県内の山岳を訪れた登山者はおよそ七五万二、〇〇〇人ですが、このうち七、八月の登山者はおよそ五五万九、〇〇〇人で、年間登山者の七〇パーセントはこの夏山に集中しており、本年はさらに増加し、夏山登山者はおよそ六〇万人に達するのではないかと思われ

遭難事故の原因

山の遭難事故は、直接的または間接的な原因が複雑にからみあって発生しますが、ザイルが切れたとか、ハーケンが折れたというように装備の欠陥による事故はさきわめて少なく、雪渓の上で写真をとってスリップした、浮石にのつた、つまづいたというようにちょっとした注意を欠いた、または無理をしたというものがほとんどであり、特殊な不可抗力的な事故を除き登山者自らの過失によるものがその大半を占めています。

ある年の夏山のことです。穂高の岩場を登はん中のクライマー二人のうち一人が、ハーケンが抜けて転落し重傷を負ったという届出がありました。早速洞沢の県警救助隊と遭対協常駐隊が出動して負傷者を救助し、遭難関係者から状況をよく聞いて



遭対協救助活動(奥穂高尾根から扇沢へ転落)

みると、登山日程の後半で相当疲れが残っており、二人ともそのルートは初回で、研究不足のためルートをまちがえており、さらに岩登りの訓練は、丹沢において二、三回行なった程度ですぐ滝谷の岩場にとりついた等々、きわめて無謀な岩登りであったほか、当日は同ルートの登はん者が多く、取付点で三時間ほど待ち午前一時ごろから登はんをはじめたこと、登はんルートは何回もまちがえてようやく本ルートに戻り登はんを続けたが、精神的にもまた肉体的にも疲労が激しく、足がすべって転落、その衝撃でハーケンが一本抜けバートナーの確保で停止した、という事実が判りました。

昨年の夏山においてもこのような転落事故が最も多く五九件中三八件で(死者八人、負

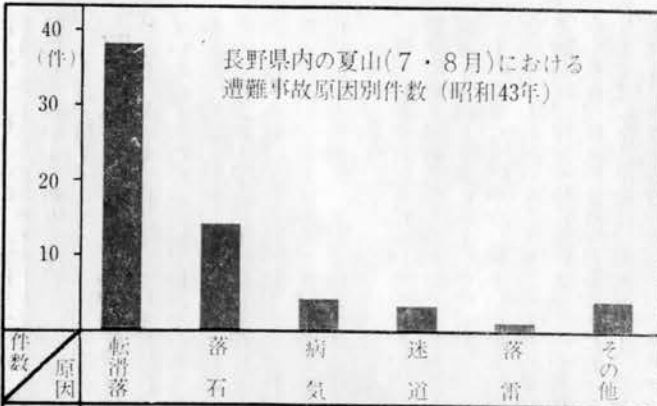


穂高湖沢金における負傷者の救助活動

夏山から秋にかけては、グループ登山を嫌う単独登山者が増加します。単独登山は自由気ままな登山を楽しむますが、登山計画の検討から、装備、食糧の携行、行動中の判断等々、すべてひとりで行なうわけですから相当の経験者であっても、なかなか大変なことです。ましてや初心者にとってはきわめて危険で、特に事故が起きたときはどうすることもできません。昨年も単独で後立山連峰を縦走していた登山者が、強風雨の中を行動したため、極度の疲労とが重なり発熱し、登山道に倒れているところを折よく通りかかった登山者に助けられて山小屋に収容されましたが、すでに遅く死亡するといった事故がありました。夏山だから、二、三日の登山だからといった甘い考え方は登山に通用しません。また、遭難者のおよそ六〇パーセントは一九歳から二五歳の若い人たちです。春

傷者三七人)で六四・五パーセントを占めています。また、落石によるものが九件、登山中急性肺炎等の病気になるものが四件、道に迷ったもの三件、落雷一件、その他四件となっています。特に三、〇〇〇メートルの山稜の登山道は、ほとんど岩石だけのガラガラ道またはロッククライミングの技術が必要とするような岩場地帯です。また、その下方が登山対象の岩場であったり、雪渓が続いている、登山道があたりして夏山ともなれば常に登山者が歩いており、不注意にも落石を起こすと大変なことになります。昨年も北アルプスの白馬岳において三件の落石事故が発生し、三人が死亡、二人が重傷を負いました。雪渓での落石は音がないだけに特に注意が必要で、危険な場所を通過する場合は、リーダーはあらかじめ見張員を指名して落石に注意するほか、集団の場合は、小人数に区切

って安全に通過させることが肝要です。登山中の病気はいかに多く昨年の夏山では心臓が弱い一人が亡くなっています。特に登山日程が長いような場合、または雨にぬれた場合などは風邪から肺炎に移行しやすいので注意が必要です。また、昔からコワイものは地震、雷、火事、というように登山をしていて最もコワイものは雷でしょう。昨年は西岳付近に暮らしていたパーティが被雷(テントのポールに落雷)し二人が軽傷を負っています。なお、昭和四二年の夏山においては、北アルプス西穂高岳独標において、高校生一人が死亡、一人が重軽傷を負うという史上いまだかつてない大規模の落雷遭難が発生しましたが、稜線では常に雷の発生源の中を歩いているということをお念頭におき、早目に登山行動を中止するほか、テント等を設置する場所も、これら気象状況をじゅうぶん考慮して設置することが大切です。



槍・穂高～後立山連峯の夏山(7・8月)における最近5カ年の遭難発生状況

年別	39	40	41	42	43
死者	5	2	3	4	6
傷者	2	9	13	6	20
救出者	0	0	3	1	2

秋に富む多くの若い青年が山で亡くなり傷つくことは残念なことです。
めん密な計画と慎重な行動を
単なる旅行であっても私たちは汽車の時間から持ち物、着替え、宿泊場所、遊び場所、行動日程などかなりめん密な計画をたてます。まして自然が相手であり急激な環境の変化をもたらず登山は、それ以上の詳細な調査、計画、準備ならびに精神的、肉体的な苦しみにあたえる心構えが必要であります。苦勞のない楽しみだけの登山は、登山ではなくピクニックであって、三、〇〇〇メートルの山へ登るからには、事前のじゅうぶんなトレーニング、調査、研究がなされなければなりません。最近では少しも楽をして少しも高い山へ登ろうという風潮がみられ、大学山岳部等においても新人部員が減少し、加えて訓練、トレーニングを嫌うといった傾向が見られるようですが、登山が内包する本質的なものを

しっかり見きわめ、より安全性の高い登山心がけ実行していくことが大切ではないかと思えます。
登山は、本来個人の自主的な活動であって、外部からなんの規制、制約も受けない性格のものであります。ときに思いがけない事故が発生し多くの人に迷惑がかかる場合があります。このようになるは本来自由な活動であっても勝手気ままな行動は許されず社会的、道義的責任が生ずるようになるわけであって登山が大衆化され、遭難の形態も多様化の傾向が目立ってきたこのころ、登山をされる方は、あらためて遭難事故のもたらす社会的な影響を認識し慎重な行動を望むものであります。
ことしの夏山も安全で楽しくかつ思い出の多い登山をされるようお祈りします。
(県警本部外動課)

長野県山岳総合センター

上 条 徳 治

長野県山岳総合センターは昭和四三年九月一八日に起工式をあげ、昭和四四年五月二三日に竣工式とかねて開所式をすませ、すでに講習会など各種の事業が始められています。

この施設の概要についてセンター次長の上条徳治氏に紹介していただきました。

―はじめに―

梅雨空があけて、からりと晴れた夏空に変わると、アルプス等の峰々は、ひととき高くそびえ立ち、岩間に咲く高山植物も可憐な花を開きます。すると、それを待ちかねたかのようによくの人々が、これら自然の美しさを求めて信州の山や高原を訪れます。

ここ数年、これらの人々の数は急激にふえて、信州の山々に入る人口は年間一〇〇万人を超えると言われています。

このように登山人口が増加するにつれて、山岳での遭難事故もまた増加の傾向を辿っており、一方登山者の層が厚くなったことなどから登山者のモラルの低下も目立ち、心ない一部の人々によって自然が破壊されつつあります。

このような現状にかんがみ、長野県としては、関係機関が相協力して遭難事故防止や自然保護のため種々努力をいたしておりますが残念ながらこのような傾向は依然としてあとを絶たない状況にあります。

また、加えて近年における機械文明の急速な発展にともない、生活様態も大きく変革しつつあることから、登山をはじめ野外活動に対する国民の欲求は益々高まる傾向にあります。

このような実情や、傾向に対処するため、広く組織立って登山教育を行なう必要が生じてまいりました。このため、これら社会的、教育的必要性に即して、安全に於て堅実な登

山を行なうとともに、自然保護思想の普及という願いをこめて、ここに、長野県山岳総合センターが誕生したのであります。

―第一位―

山岳総合センターは、地元大町市の多大なるご協力によりまして、大町市で最も景勝の地、後(うしろ)立山の連家が一望のもとに取られる大町公園の一角に、市立山岳博物館に並んで建設されました。

―事業―

山岳総合センターは、五月二三日開所されて以来これにちまして、既に六回の研修会または講習会を実施しており、約五〇〇人の方々がこれを受講されておりますが、主な事業としては、建設の趣旨に沿い山岳スポーツの振興をはかるとともに山岳での遭難を防止するため、登山・スキーなど野外活動の研究指導とこれら指導者養成のための研修会、講習会を開くのをはじめ、登山相談や、山岳に関する資料収集、調査研究を行なうほか、併せて自然を育む思想の普及をはかるための展示を行ない、広く一般の人々にも自然教育の場として利用していただくことになっております。

―運営―

また、これの運営如何はその効果に及ぼすところが極めて甚大ですので、運営については、学識経験の豊富な方々から種々ご意見をお聞きし、それらをじゅうぶん反映させるとともに、研修会、講習会の講師については、当センターの専門主事のほか、外部講師とし

て県内外の学識経験者のうちから適任者を委嘱し、それぞれの方々に専門的な立場でのご講義をお願いしております。

―施設―

施設の主なものとしては、自然保護の見地から、長野県の自然等について興味深く見ていただくための展示室、講義を行なう教室、映写室を兼ねた講堂、学習のための図書室、資料室等があり、宿泊して研修を行なうため約六〇人を収容できる宿泊室、食堂、浴室、談話室等が完備しております。なお近代的な山岳関係の装備も一とおり備えてあります。

―利用―

次に利用の方法等についてですが、山岳に関する調査、研究ならびに登山に関する研修訓練を目的とするグループの会合には、センターの事業に支障がない限りいつでも利用できます。したがって、施設の利用を希望する場合は、所定の申込書によって一か月前に申し込み、所長の許可を得ることになっております。(申込用紙は、当センター、県教委体育課、教育事務所および支所にあります。)

この場合、希望によってはセンターの専門主事が指導助言を行ないますし、また講師のほうもあつせんも行ないます。

なお施設等の使用料は無料ですが、食費およびシーツ等の洗濯代実費は負担していただくことになっております。

―むすび―

以上山岳総合センターの建設趣旨その他について述べましたが、長野県が全国にさがかけて行なったこのような画期的な試みが、立派な成果を収め、本県からはやがて山での遭難という悲劇が皆無となり、一方自然保護思想の普及によって、自然味に富んだ風土により育まれてきた情緒豊かな県民性が、いつまでも、失なわれないよう祈ってやみません。

一本の草にも木にも愛護の手



大町山博に於て建設された長野県山岳総合センター

博物館だより

ライチョウの雛が生まれました
山博で飼育中の四つがいのライチョウは、禽舎の中で産卵し、産卵数が多すぎたので母親以外にチャボの仮親にもあずけて抱卵させていましたところ、六月二二日から孵化が始まり、このうち二四羽はきよ弱質や病弱などにより死亡し、現在(七月一日)六羽の雛が育っています。

〔訂正〕 第14巻6号「博物館だより」でお知らせしました昭和四四年度大町山博協議会委員のうち、太田等子氏は西山たみ子氏の誤まりでした。お詫びして訂正いたします。

山と博物館 第14巻第7号
発行所 長野県大町市 TEL大町(026) 2111
印刷所 大町市下仲町 山岳博物館
印刷部 大町タイムス印刷部
定価 年額 三〇〇円 (送料共)